

---

# 十勇士の裔ども

岸本

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十勇士の裔ども

### 【Nコード】

N9159U

### 【作者名】

岸本

### 【あらすじ】

あらすじ？ 作品の大まかな流れ？

そんなものは「ご」いません。

おそらく日本一下らない、真田十勇士だと自負しております。

全員グダグダやっているだけです。作者もグダグダです。

たまにメタります。更新も、気が向いた時だけとなりますでしよう。

それでも良いよ、という方はまあ、読んでやって下さい。

## はじめに

虎は死して皮を残し、人は死して名を残す。

真田左衛門佐信繁という人物をご存知だろうか。

元は、武田信玄に仕えた信州上田城主・真田安房守昌幸の、次子であり、関ヶ原合戦時には父昌幸と共に上田城に籠城。徳川秀忠を攻めあぐねさせる。為に、秀忠は関ヶ原合戦に遅参。父家康から大目玉を食う。つまり、居城に居ながらにして、信繁は勲功をあげた。大阪冬の陣においては、大阪城南の惣構の外に真田丸なる出城を築く。夏の陣では家康本陣を急襲。その際に、実は、家康の首級を取った、そんな説もある。

彼のことは、むしろ、真田幸村と言った方が、通りがいいだろう。大阪落城後、幸村は、越前松平藩士の西尾久作に討ち取られ、その生涯を閉じたとされるが、実はそれ影武者で、実際は落ち延び、島津氏に庇護されたのである。

そんな幸村に仕えた十人がいる。猿飛佐助を筆頭に、霧隠才蔵、三好清海入道、三好伊三入道、穴山小助、由利鎌之助、望月六郎、笈十蔵、海野六郎、根津甚八の十人である。

彼ら十勇士は、時代を経てもなお、真田家と共に生きているのである。

## 顔見せ

今日も、会議は脇道に逸れた。

「だから、カレーライスか、ライスカレーか、本当のところはどうなのか、と」

真田家第二十代当主予定・高校二年生・真田雪が、ビミューな表情を作った猿飛家次期当主・高校二年生・猿飛佐助に、そう言った。佐助は、一度ぐるりと、この場に居る十人を見渡すと、うんざりしつつ、

「カレーライスだろ。普及度から言って」

当たり前前の事を言った。

だが、高校二年生・三好清海はのみは鼻で笑った。佐助はこっそりと心の中で彼女の事を『本家バカ』と呼んでいる。ちなみに、雪の事は『元祖バカ』と呼んでいる。

「そーゆー古臭い事しか言えない人間が、世の中を所々なんかそんなふうにしちゃうのです。あたしのお父さんなんかね、あたしがスーパーファミコンやってても、『そろそろファミコンやめて、勉強しなさい』って言うのよ？」

今時スーパーファミかよ。てか、お前のお父さん、間違っ  
てないわけでもないし。

佐助が脳みその片隅でだけ、つつこんだ。だが、一筋縄でいかな  
いのが、ここに居合わせた連中である。

「ひどいな……！ 8bitマシンと16bitマシンの区別も付  
かんとは！ 抗議したのち講義しなければ！」

自称天才科学者（佐助は『天災科学者』と呼んでいるが）・高校  
三年生・望月六華りっかは鼻息荒い。

「卵かけご飯。かやくご飯って言うだろ？ つまり、上から順に、  
言ってるわけだ。あと、語尾が『ん』とか『ス』の方が、語感良い

しな」

清海と六華を完全に無視して、佐助は結論付けた。

「ちよつと待つて！」

待つたをかけた保険医・根津末広みひろ。この場の最年長・二十五歳である。彼女は、只今、酒に酔っている。

「才麗ちゃんが分身の術使ってる！」

目下、国語教師・二十四歳・霧隠才麗きりかくは、ピースの煙をひっきり無しに吐き出しているだけで、それ以外何もしていない。

「だったら、ライスカレーじゃないの？」

雪も末広を無視して、なんとも不思議そうな顔をする。

「なんで？」

ちよつとイラツとしながら、佐助が問うと、

「ホワチャー！ ユーアー？ ネイーム？」

英語らしき質問返し。

「……マイネームイズ、サスケサルトビ」

「ほら！」

「だから、なんでだよ」

「カレーって、日本語じゃないし。だったらファーストネームからでしょう」

「カレーにファーストもファミリもあるか！」

語気を荒げる佐助。と、

「カレーってさー、あれ、カレーがかかってんじゃ無くて、ルーがかかってんだよね？」

パチンコ雑誌を熱心に読んでいたはずの、英語教師・二十四歳・穴山千代ちよが口を挟んできた。

「……またメンド臭い意見を……」

佐助はそう、呟かざるを得ない。だが、雪は即座に結論付けた。

「ルーは、ミドルネームってことで解決します！」

「おぉー」

パチパチと拍手が上がった。佐助も拍手した。ここで結論ほいの

が出た以上、これからさきは面倒くさいだけである。

「それはそれとして、どうでも好いけど、さっきの二人とも発音おかしいから。そんなんじゃ、外人と卓囲んだときに、苦勞するよ」

卓。千代の言う、卓とは、詰まるところ、マージャン卓のことである。

「こないだ関西弁のアメリカ人と打ってさ、発音の間違いとか色々指摘されたんだよねえ」

「あのさ、カレーライスかライスカレーは、ぶっちゃけ、カレーがご飯に掛かっている状態が出て来るか、別個に出て来るかの違いなんじゃない？」

才麗は短くなったピースを、彼女しか使わない灰皿に押し付けながらそう言った。

「ま、この説自体、どうなの？ ってカンジだけど。結局、どうでもイイよって事よ？ ちなみに、夏目漱石は、『漱石日記』に『ライスカレー』って書いてるけど。あ、そうそう、日本だけじゃないと思うけど、いわゆる、庶民が使ってた物とか、言葉とかが、上流階級に使われ始めて、それが常識化する、てのがあるんだ。麻の着物なんか、いい例。昔、麻なんて身分低い人の着物だったのが、いまや高級品だしね」

「昔、牛肉の替わりだった鯨のお肉が、今は高いのと同じ？ グレシヤムの法則ってやつ？」

高校三年生・海野十六夜いそよが、珍しく声を出してボケた。彼女は、生きるのに必要なエネルギーの摂取 食事すら、たまに面倒だという人間である。顔見せだから、ボケたのである。

完全に、駄目な生徒を見る目つきで、才麗は、  
「違う。ちなみに、グレシヤムの法則って、何なのか知ってる？」

才麗は教師以外の全員に向けて言った。

「はい。誰かわかる人」

いの一番に手を上げたのは、保険医・末広だ。

「分身のやり方を教えてください！」

「めっちゃ速く動け。はい、他にわかる人？」

「はい。めっちゃ速く動くにはどうしたらイイですか！」

「めっちゃ頑張る」

「めっちゃ頑張ってめっちゃ速く動くと、今の私、吐きます！」

なにせ、酔いどれ天使である。そりゃあ、そうだ。

「あたし、頑張る、って言葉、嫌いなんだ……」

十六夜は眠そうな顔でぼそりと言った。

「むしろ、死んだほうがマシなんじゃない？」

本家バカの もとい、清海の妹である三好伊為三いなみは聞こえよがしに言う。

「どうせ、その内、生きるのも面倒だとか言い出すだろうし。生きてても寝てるだけでしょ？」

「うん。そういう生活したい」

十六夜は怒るでもなく、むしろ、本気で魅力を感じているらしい。「どうせなら、あたし、ナメケモノに生まれたかった……」

いつの間に取り出して火を点けたのか、才麗はピースの煙を吐き出しながら、

「はあー、ほんと、アルティメット級のダメ人間だな、おまえ」

「違う違う。Ultimate」

千代が発音を示した。

「アウテメット」

なるべく忠実に発音してみる才麗。

「Nonono。Ultimate」

「悪いけど、もういいや。どうせあたし、外国行く気ないし」

「あっそう？」

「大学出てまで、英語勉強したくないし」

「才麗、英語で道訊かれたら、どーすんの？」

伊為三が割って入った。

「わたしなら、殴るね。大体、日本人は大抵、その国の会話本持つてくのにお前らはなんだと。デリカットかスペクター級の会話力

を持ってから来るのが礼儀ってもんでしょうが」

「うん。さすが伊為三。よく言った。その意気や良し！」  
才麗も力強く同調した。

違うだろう、それは。

佐助は、心の中でだけ、つつこんだ。

「これ？」

メイド服に身を包んだ高校一年生・笥十環とわは、右手を佐助の顔の前に持っていった。親指と人差し指を伸ばし、中指は人差し指と九十度になるよう、これまた伸ばしている。

「何が……？」

「グレシヤムの法則？」

「二重に違う。そりゃフレミングの法則だし、左手使え」

「へえ。佐助って左手派？」

くつく、と笑った、高校二年生・由利詩来うたた。

「左手の法則なんだから、そもそも左手だろうが」

面倒臭い、危ない、面倒臭い、とは、直感しながらも、佐助は思わずつつこんでしまう。

「利き手に比べて、ぎこちないのがイイって言うよね」

と、詩来は意味ありげにウィンク。

「何のハナシ！？今はフレミングさんの話をしてんだよ！」

「すいませんしたー！」

詩来は頭を下げながら、左手を突き出した。モザイクを、かける必要があった。

「下ネタはやめろっ！」

雪と清海は、指を目の端に当て後方に引っ張るようにして、目を細めた。

「何やってんだ」

「いや、モザイクって、目を細めれば見えるって、聞いた事があるから……」

元祖バカが答えた。うんうんと頷く本家バカ。二人を憐れむ様な

目つきで眺める六華は、

「あのさ、帰っていいかな？」

ふう、やれやれと、溜息を一つ。

「それは、こっちの台詞だし、一番最初の議題について、何の結論も出てねえんだけど！」

「一番最初の議題？」

「ちよい待ち。佐助、今のは日本語としてどうなの？ 一番最初って」

「うるせえっ！ これ以上脱線するようなこと言っな！」

佐助もいい加減、声が荒くなる。しかし才麗は、バカ二人とは違った意味で、目を細めた。

「ほう。非納税者の分際で、あたしにそんな口利くとは、いい度胸だ」

「……すみませんでした霧隠先生……」

謝る他は無かった。才麗は佐助の担任でもある。

「まあまあ。才麗もそれくらいにしてさ。私もそろそろ船券買に行かなきゃだし、ちゃちゃっと最初の議題終らしちゃお」

千代がとりなした。彼女に続いて、十環が援護射撃。

「わたしも。観たいアニメあるし」

「わたしはグラボとSSD買いに行かなきゃいけないし」

と、これは六華。

「ちっ、仕方ない。許してやる」

三人にまでとりなされて一（？）、才麗もこれ以上は大人気ないと感じたようだ。

「で？ 最初の議題ってなんだっけ？」

「確か、カレー・ルー・ライスか、ライス・ルー・カレーかトウギヤザーしようぜ？」

「だから違う！ 隣町の高校が徳川連合の支配下になったから、うちとしてはどうするかって話だよ！」

「そんな事言われてもねー」

雪の口調には、やる気、言うものが感じられない。

「お前この委員の責任者だろうが」

「運動部は軒並み弱小。偏差値だって高いわけじゃない。果たして他校にとって魅力ある学校でしょうか？」

「それを言うか……！」

「じゃ、結ろーん。多分何とかなるつつうこと。はい。解散」

雪は底抜けに明るい笑顔で手を叩いた。

「はあっ!？」

直後、メンバー達は三々五々椅子から離れて、部屋を出て行く。

一分と立たずに、取り残された佐助。目の前には、十六夜が手枕で寝ている。

なんで俺……あんな奴らと関わってるんだろ……？

理不尽な己の人生に、悲しくなった。ひとしきり嘆いたのち、佐助も帰ることにした。

「おい。十六夜。帰るぞ。起きろ」

彼にとって、彼女は一学年上の先輩である。にも、関わらず、呼び捨てた。ナマケモノに敬称は要らないと、思っているようだ。

揺さぶると、十六夜は億劫そうな声で、

「いい……。帰るの、面倒くさいから、あたし、今日、ここで寝てる」

そう告げて、ガチで寝始めた。

なんで俺……こんな奴らと関わってるんだろ……。

佐助はマジで泣きたくなった。

## ラゲナロク

霧隠才麗の授業は、生徒達から、すこぶる評判が悪い。

「で、だ。この黄昏という言葉は、夕方に日が落ちて、辺りが暗くなつたとき、少し遠くにいる人の判別が難しい所から来ていて、才麗が黒板に『黄昏』と書いたのち、語源の解説を始めたのだが。」

「先生。あのう、窓、開けてもいいですか？」

「……今日、寒いからダメ」

「じゃあ、タバコやめて貰っていいですか？」

「あ。無理。あたしニコチン摂取し続けないと、死ぬから」

「正直、先生のタバコの煙で、黒板どころか、先生の顔すら見えにくいですけど」

「そういうのは、黄昏とは言わない」

「言ってますし、そういう事を言いたいんでもありません」

松永君が言った刹那だった。

ばたん　つ、と誰かが倒れた。

「ひろみっ!？」

ひろみと呼ばれた子の、隣の席の女子が叫び、慌てて抱き起こした。

「ひろみ!　しっかり!」

「うっ……気持ち悪い……肺ガンに……なりそう」  
首が、がっくり。

「ひろみ!　ひろみー!」

「保険委員。保健室連れてってやれ」

と、丁度、チャイムが鳴った。

「お?　今日はここまで。明日の予習、ちゃんとしとけよ」

才麗はそう言って、教室を後にした。直後、生徒達が窓を開けて

換気をし、ファブったのは、言うまでも無い。

## 二人天使

昼休み、猿飛佐助が守るゴールに、ボールが勢いよく飛んできた。  
「佐助！」

仲間の声に佐助は、

「じゃあ！ 任せろ！」

力強く答え、横つ飛びにボールへ跳び付いた。運動神経には自信のある佐助だが、この時ばかりは、目測を誤った。

「ぐおっ！」

石崎くんばりの顔面ディフェンスで、ゴールネットは揺れなかったが、

「大丈夫かー？」

敵味方問わず、佐助を心配して、ゲームが中断された。

「痛っ。ああ、大丈夫」

答えた佐助だが、生温かい、鼻水では無い鼻水が、鼻腔の奥から下がるのを直後に感じた。

「あ、ヤベ」

「ありやりや、鼻血か。保健室行かなきゃな」

「くう、みつともねえ……。この年になって鼻血垂らすとは」

佐助は鼻血被害を食い止める為に、顔を上げて言った。

「佐助、ほら、ティッシュ」

クラスメイトの一人からティッシュを受け取って、鼻に詰める。

「付き添ってやるよ。そうすりゃ、五限目サボれるかもしれないし」

「いや、俺が付き添おう」

「いや、俺が俺が」

クラスメイト達は、自分が付き添うと口々に言い出す。彼らの五時間目の授業は、霧隠才麗の受持ちである。

結局、じゃんけんで、幸運なる者が決められた。

「チクショー！ グーで来たかー！」

不幸なる者の叫びを背中に受けつつ、佐助は戸澤君と共に保健室へ向かった。

保健室のドアを開けようとして、

「戸澤？」

戸澤君の手が、止まった。と、戸澤君は中の様子に、耳をそばだてた。

「どうした？」

「いや、なんか、中入るの、危ない気がして」

「はあ？ それより、俺の方がヤバイわ」

佐助の鼻血は一向に止まる気配が無い。ここに来るまでの五分で、三枚のティッシュが、血みどろになっていた。

渋る戸澤君を尻目に、佐助はドアに手をかけ、開けた。

優に八人の男子生徒が陶然とした表情で正座をしているのが、まです目に飛び込んできた。

「っー！」

ぎよっとする佐助と戸澤君。次に飛び込んできたのは、耳にだつた。

「『あんだなんかに！』」

ナオミは官能の疼きに身を悶えながらも、アキラを罵った。ずっと、見下してきた男へ、僅かな、だがすぐに壊れるプライドを持つて。

『流石は、学園のアイドル様だ。でも、こっちは素直だぜ？』

ニヤツと、薄く笑ったアキラは、指をナオミの顔の前に持っていた。

『ほら。みてみる。こんなになってる』

『いや』

アキラは容赦が無かった。左手でナオミの顔を掴んで、背ける事が出来ないようにすると、執拗なまでにナオミの

「何やってんだ……？」

意識を回復した佐助が口を開いた。

「なっ!? 何奴!」

ドアが開いたことにすら、気付いていなかったらしい。八人は腰を浮かし、明らかに狼狽した。

「俺達の秘密集会を知ったな! 貴様!」

「は?」

「あら? 佐助?」

と、カーテンに仕切られた奥から、由利詩来うたたが、顔を出した。

「詩来……お前何やってんだよ」

「うん。週に一回の朗読会」

詩来は艶然と微笑んだ。

「朗読会??」

「佐助も参加する? 五百円ね。って、やだ、もう興奮しちゃってるの?」

「違う! これはサッカーしてて! てか! 今後やめる! 品性が問われる!」

「誰が、誰に?」

「え……? いや、それは……とにかく! やめる! いいな!?」  
かなり強い語気で佐助は通告し、詩来も、

「結構なお小遣い稼ぎになってただけだな」

渋々承諾したもののだが、

「やめないで下さい! 詩来さま!」

「週一回、月曜日に詩来さまの御神託で、俺達は一週間を生きられるのです!」

男子八人、大号泣。てか、御神託で。

「お前らにとつて、コイツは女神かなんかか?」

「何を言う! 詩来さまは俺達の天使だ!」

女神と天使って、女神の方が格上だよな……?」

佐助だけでなく、戸澤君ですら、そう思った。

「世の中、需要と供給で成り立ってるしね。やめるわけにはいかな

くなっちゃった」

詩来は言つてのけた。

「五百円か……」

戸澤君は拳を口に当てて、真剣そうであつた。

「しつかりしろ戸澤！ ……先生！ 根津先生！？ 居んだろ！ 先生からも……」

ちよつと待てよ？ 年中無休のアル中保険医に言つたところで、無駄なんじゃねえか？

保健室の主の人となりを思い返して、佐助は言葉に詰まつた。そこで気付いたのだが、根津末広保険医は、どこに行つたものだろうか？ パツと見、見当たらない。デスクにも居ない。

「末広先生なら、そこに」

詩来は、自分が腰掛けているベッドの隣を指差した。佐助が近付いて、ベッドのカーテンを開けると、えもいわれぬ臭気に見舞われた。

「うっ！ 酒臭っ！」

ウイスキーの大瓶を抱えた末広が、横になっていた。

「酔つ払つて寝てるわ」

「……見りゃ分かる」

コイツ……よくクビにならんよな。

佐助の胸に去来する疑問。いつの間にか、鼻血は止まっていた。

だが、五時間目の才麗の授業はサボつた。

そして、翌週から、月曜日になると戸澤君は、昼休みに姿を消すようになった。

## ぎゃわんぶらあ

「ニュースでよく聞く、脱税と横領の違いが分かりません」  
職員室で。

高校二年生にもなって、三好清海はそんな質問を、穴山千代英語教師にした。

三好清海という生徒を知る教師陣にとって、この手の質問は、日常茶飯の事だ。以前など、APECとOPECの違いを、二日続けて、同じ教師が同じ説明をした事がある。

「脱税って言うのは、本来納めるべき税金を納めない犯罪。横領は、本来自分の物ではない公金。会社のお金などを、自分の物としちやう犯罪。なんでそんな事気になったの？」

千代は、小学生にも解る様な説明をしてから、訊ねた。

「今日の朝、たまたまニュースを観てたら、五千万円脱税した人と、五千万円横領した人がいて、こんがらがりました」

「ああ、両方競馬に突っ込んだって、やってたね」

「はい」

「全く、五千万も遣うなら、他にもっと遣い道あったらうにねえ。自転車とか、ボートとかさ」

「本当ですね。そういう健康的なモノだったら、ニュースになんかならなかったでしょうに」

千代と晴海の会話を聞いていた、教師の一人が、隣の教師に小さく、呟いた。

「穴山先生の場合、そう言う意味じゃないよなあ。きつと」

「と、言うより、そう言う意味じゃなくてもニュースになりますよね？ 普通」

## 売り切れゴメン

「佐助！ 付き合え！」

猿飛佐助が、下駄箱に上履きを突っ込んだ瞬間、一学年上の望月六華りつかの襲撃を受けた。

「六華……悪いけど俺、お前は好みじゃ」

「今日は、年一回お一人様一個のメンズデーなんだ！」

「は？ メンズデー？」

「いいから来い！」

六華は佐助に突進し、ぐわしつと腕を掴んだ。

「さ 佐助！ ちよつ、え！？」

実際に腕を掴まれたのは、戸澤君だったが。

「うん？ お前誰だ？」

「と、戸澤です……」

「丁度良い！ お前も付き合え！」

「え！？ お 俺も、根津先生ならともかく、先輩みたいな人は好みじゃ」

結局、佐助と戸澤君は、六華に付き合う事になった。パソコンのパーツショップに。

「あのさ……。それは、無理があると思う」

ショップの前で、佐助は六華に忠告し、戸澤君も頷いた。

「さすがに、付髭だけじゃ……無理なんじゃないスカね？」

「そうだろうか……？」

「うん。そうだろう。お前そもそも女子制服着たままだろ」

「むう。では考えよう。最新のCPU、高付加価値のマザボ、ゴールド認証の電ユニ。どれか一つを諦める場合、どれだ？」

「あの……そもそも三つとも分かりません」

「ていうか、そんなマニアックな事、俺らに訊くな」

「むづう……！ お前ら使えないな！」

付髭の高校三年生の女の子は思い切り顔をしかめた。

「そもそも、無理矢理つき合わされてるんだけど、俺ら」

「マザボって、なんすか？」

「マザーボードだ。これによって、搭載できるCPUやメモリが決まる……！ ちなみにCPUから考えた場合、選ぶマザボが決まる」

「電ユ二って言うのは？」

「電源ユニットだが？」

「そうすか……」

「かなり大事なんだぞ！」

「いや……まあそうなんでしようね」

六華は、イラついたように地団太を踏んだ。

「想定外！ 想定外だ！ 丁度良い男子も捕まえたと思ったのに！」

「あのさ……さっきの話を鑑みるに、CPUってのと、マザボってのと、なんか、切っても切れない感じがするんだけど」

「ほう、佐助。いいところに気がついたな」

「だったら、電源ユニットとか言う奴、諦めたら良くね？」

「……それがそう言うわけにも行かない」

「なんでっすか？」

六華は、恥ずかしそうに答えた。

「もともと、私が組んだマシンの電源供給容量が問題でな。変換効率の悪い電ユ二では、常に落ちる危険性がある。だったら、最新CPUと付加価値のあるマザボから、組み立てなおしたら、とそう思ったんだが、そもそも、電源が安定してないと、それも意味が無いって言うか、何と言うか」

「なんだか、ジャンケンみたいな話である。」

「てか、なんで一つを諦めなくちゃなんないんすか？」

「金が無いからだ！」

戸澤君の疑問に、叫んだ六華。

「金さえ有れば……！ せめて八十万円あれば……！ CPUクー

ラーは水冷、SSDとテラ級HDD！ BD対応ドライブ！ メモリ最大！ CPU最高最新！ グラボ複数！ 高級ディスプレイ！  
組めるのにつ！」

「はあ……全然解んないっすけど、なんか凄いのは解りました」  
理解の範疇を超えた為に流れる汗を、頬を搔く仕草で、人指し指  
を使って拭った戸澤君。

「じゃあ……いつそ三つとも諦めたら？」

言い終わらないうちに、佐助の頬に六華の拳が伸びた。

「ぶっ！」

「だったら最初からお前らを連れてきてない！」

「いや……お前なら、自分で一から作れんじやないかな……と」

「なに……？」

科学者魂を揺さぶったつもりであったが……。

「CPUもマザボも電ユニも自分で作れと？ 出来るか！ バカ助！  
貴様CPU一つ作るのにどれだけの設備が要るか知ってるか！  
？ CPUをあのサイズにまでするのに！」

「いえ……知りません」

「全く……パソコン一つ組めない人間が、偉そうなことを言うな。  
と言うか、シヨップもシヨップだ！ パソコン組む奴なんて、基本  
男ばかりじゃないか！ なのにメンズデーなんて必要か？ レディ  
ースデーこそ作れよ！ なあ？ 前田君」

「それを俺に言われても……それに俺は戸澤です」

このままでは、埒が明かないと感じた佐助は、

「とにかく、どれか一つ諦めるしかないんだから、何にするかしっ  
かり考えたら？」

熟孝を促した。

「おお……佐助にしては珍しく建設的な意見だ」

「うるせえよ。お前らに比べたら俺はいつも建設的なつもりだよ」

「じゃあ、CPUとマザボ諦める」

「早っ！ しかも二つ！？」

「いや、CPUだったら、そろそろ新製品出るらしいし。マザボもそのCPUの規格によつては使えない場合あるし」

事も無げに言う六華。

あははつと笑つて、六華は付髭を外した。

「そうと決まれば、レッツゴー！」

佐助と戸澤君を伴い、六華はショップへ入っていく。

五分後……。

電源ユニット陳列棚の前で、六華は愕然とした。別の場所では戸沢君が目を輝かせている。

「へえ……これがマザーボード……。なんかメカつて感じ」

蘇芳色の基盤の上を複雑に走る銅線。青や黄色のメモリスロット。コンデンサや各種回路が整然と並ぶ。ほぼ真ん中に、CPUソケットがある。

戸澤君が感想を洩らしたマザーボードは三万円ほどする、高級品だ。

最新のCPUに対応。十機のUSBポート、メモリは最大24ギガバイト、PCIエクスプレス×16、と、説明するとキリが無いのでやめよう。

「なるほど 確かに、こういうのって、俺ら男子は見てるだけでもちよつと楽しいな」

佐助も、少し声音が変化している。小学生の頃、電化製品を分解しては、悦に入っていたのを思い出す。

「……無い」

佐助とは違った意味で、六華の声音が変化していた。

「ああああ……無い……狙ってたのが……無い！」

震える声。視線を辿ると、商品の札の上の、何も無い空間。

「売り切れじゃないスか？」

「もう夕方五時だしな。他のじゃダメなのか？」

「それじゃ計画が狂う……」

結局、六華が狙っていたものの内、在庫があったのは、諦めたは

ずのCPUだけだった。

「今のマシンじゃ、規格が違うから、乗せ換えられない……」  
しばらくは、宝の持ち腐れになりそうである。

## 適量なら

「あー、風邪だねえ」

根津末広<sup>みひろ</sup>保険医は、体調不良で保健室を訪れた女子生徒を診察していた。

「注射打つところかー」

女子生徒は、注射と聞いて、蒼白になった。

「んー？ 注射嫌いななの？」

「だって……根津先生酔っ払ってるじゃないですか」

「お酒は百薬の長って言うしねー」

「じゃあ、なんで、先生の手はいつも震えてるんですか」

「だから、その震える手を、お酒飲んで治すんだよ？」

「……飲み薬にしてください！」

女子生徒が言うと、末広はデスクの上のグラスに、焼酎を並々注いで、女子生徒に差し出した。

「はい。百薬の長」

「あたし高校生なんですけどー！」

## 青い光・再現性（前書き）

一つの話では、最低文字制限数に届かなかった為、二つの話を合  
わせたものとなります。

ご了承ください。

## 青い光・再現性

青い光

「DVDとブルーレイの違いを教えてください」  
職員室で。

高校二年生にもなって、真田雪はそんな質問を、霧隠才麗国語教師にした。

真田雪という生徒を知る教師陣にとって、この手の質問は、日常茶飯の事だ。以前など、APECとグレゴリー・ペックの違いを、二日続けて、同じ教師が同じ説明をした事がある。

「知らねーよ。んなの六華に訊けよ」  
才麗は、ピースの煙を吐きながらそう答えた。

再現性

登校中、三好伊為<sup>いなみ</sup>三は、笈十環<sup>とわ</sup>と一緒にになった。学校指定の制服に身を包む伊為三と違い、十環は、まるで他校の制服みたいだ。

「十環、今日のそれ、誰？」

十環から説明を受けたが、伊為三はそのキャラクターどころか、タイトルすら、知らなかった。

「ふーん。今日服装検査あるの、知ってるの？」  
十環は笑顔を作る。

「知ってるよ。多分ビツクリするんじゃないかな？ この服、凄く細かい所まで忠実に再現してるから」

「……アホくさ。てゆうか、コスプレって、そんなに良いもんなの？」

「うん。楽しいよ？ ほら人間てさ、変身願望有るじゃない？ そ

れを満たせるのが良いよね」

「ああ、なるほどね。つまり十環の場合、自分が無いから、すでに確立されたキャラクターになっていないと怖いよね」

「伊為三ちゃん、今日も手厳しー！」

伊為三の毒も十環には効かない。

「はあー……」

聞こえよがしに大きな溜息を吐く伊為三であった。

## ズボラーウーマン

「海野さん！ お願いだから手伝って！」  
エプロンをかけた女子生徒が、海野十六夜こむぎに叫ぶ。

「……………うあ……………」  
女子生徒のあまりの音量に、流石の十六夜も目を覚ました。

「何を……………」  
寝ぼけ眼を擦り、寝よだれを拭う十六夜。

「お味噌汁に入れるそのニンジン、扇切りにして！」  
十六夜を起こした女子生徒は、フライパンと格闘していた。その隣では別の女子生徒が、鍋の火を気にしている。

十六夜は顔を緩慢に動かして、ニンジンを探す。すぐに見つかった。

「なんであたしが？」

「調理実習だから！ なんてっておかしいでしょ！？ そもそも調理実習で寝るか！？」

ふらふらと立ち上がって、もぞもぞと歩き、のろのろと包丁を手にした十六夜。

「……………あの」

自分を起こした女子生徒に、訊ねようとした。

「まずピーラーで皮剥いたあと、輪切りにしてそれを四等分にすればそれが扇切りだから！」

先読みして答えた女子学生。

「あたし……………この一週間くらい、お風呂入ってないけど……………」

「そのニンジンに触るな！」

「まあ、熱消毒？」

ニンジンに手を伸ばそうとする十六夜に、

「やめろっ！ やっぱアナタ寝てて！」

女子生徒は改めて叫んだ。

「うん。ありがとう」

十六夜は席に戻って、ソッコーで手枕になって、寝出した。

「この人……よく三年まで進級できたわね」

女子生徒は長嘆息した。

「あつははー。派手にやったねー」

転んで出血した戸澤君が、猿飛佐助に付き添われて、保健室で根津末広みひろの診察を受けていた。

「とりあえず消毒しとこっか」

「お願いします」

末広は、デスクの上に置いてあつた、焼酎のビンを掴んだ。すぐさま佐助が止める。

「待てやコラ。飲むなら消毒してからにしろ」

そもそも、学校で飲むな、という指摘すら忘れてしまつほど、末広は年がら年中飲んだくれている。

「飲むんじゃないよん。消毒だよん」

時代劇でよくある、焼酎を口に含んで傷口にブーッ！ という光景が、佐助の脳裡に浮かんだ。

「そう、それぞれ」

「消毒液使えよ！」

「いえ、それでいいです。ぜひそれをお願いします」

「戸澤!?!」

「で、この場合の this は……」

片耳にイヤホンをした岩山千代の動きが止まった。目を閉じて、片手でイヤホンが外れないように押さえたまま、微動もしない。

「あの、先生？」

「しっ！」

生徒の声をそれだけで止めた千代。

ざわ……

ざわ……

と生徒達は訝るが、一分後、

「よし。獲った」

特に表情を変えるでもなく、千代は呟いた。

「……競馬、ですか？」

「That's right. いやー、最近キテるわーわたし。昨日のスロットも設定6の台掴めたし。もういつちんち中、出っ放しま、最後らへん？ バケが多かったけど結局万枚行ったしね。さっきのレースも三連単の万券GET。中央からの転厩馬なんだけど」

「

訊かれるのを待っていたかのように、千代は笑顔で語りだした。

「あの、自慢話はいいで、授業してください」

「なによー。せっかく百万円になったのに」

ざわっ！



代ならず、ドラの初牌など振らない所だ。

こういうミスが、流れを変えるのを、千代は知っている。ドヤ臆も駄目徳も、ミスを犯した千代を狙ってくるだろう。

千代は気合を入れ直して、配牌を取った。ドラは南。それが三丁、配牌時にあった。ダブ南ドラ三。

絶対に取り返す！ 三十符でも十三翻あれば取り返せる！

あと八翻！

だが、八翻など、そう簡単に作れるものじゃ無い。なんとすれば仕事も辞さない覚悟だった。

だが、結局、千代は残り三局でようやっと五十万円取り戻すのが精一杯だった。

「豪気だね。惜しげもなく百万出しちゃうんだから」

「博打で獲ったお金だからね。無くて元々」

そう言って、千代は笑った。当然、心では泣いていた。

## おつかい

給料日前で、懐は少々苦しい。こんな時は鍋にでもして安上がり  
に。かといつて一人鍋も寂しい。どうしようかなーなどと考えなが  
ら歩いていた霧隠才麗なえの目の前を、たまたま、三好清海が通った。

「ああ、清海。ちょっと待て」

「ん？ どつたの、才麗っちゃん」

清海に思いつくそデコピンした才麗。

「霧隠先生、だろ？」

「うっ……。メング」

「お前反省して無いだろ？ ……まあ、いいや。お前今晚ヒマ？」

清海はコクンと頷き、

「でも、どうして？」

小首を傾げた。

「鍋食わね？ あたし作るよ？ チゲ鍋」

「食べる食べる！ お母さんに言っとく！」

清海が目が輝いた。

「じゃあ、ちよつと待ってる」

才麗はメモ帳を取り出すと、

「えーと、白菜はあったな。豆腐も残ってるから……」

足りない食材を箇条書きにしてからそのページを破くと、自宅の  
鍵、千円札と共に清海に渡した。

「あたしまだちよつと体が空かないから、悪いけどこれ、買いに行  
つといてくれない。家、上がっていいから」

「ラジャーです！」

敬礼よろしく清海は背筋を正す。

「レシートは必ず貰って来い。余計なものとか買ってきたら殴るか  
らな？」

「イエッサー！ お店はスーパー・テイラノでいいですかサー」

スーパー・テイラノ。最近出来た、ちょっとお高目のお店である。

「テメざけんな。根性焼きするぞ。コモドマート行け」

啜えていたタバコをつまんで清海のデコに狙いを定める。

「メンゴ！ 冗談です！ コモドマートに行つてきます！」

……十分後。

（あれ？ そう言えばあのメモにエノキって書いたっけ？）

三年生の榎木君の、小テストの答案用紙を採点中、才麗はふと気になった。

（うーん……多分忘れてる）

清海と別れてから、まだ十分しか経っていない。才麗はケータイを取り出すと、清海のアドレスにかけた。

『はい！ 清海ちゃんですっ！』

「あのさー、渡したメモにエノキって書いてある？」

『んー？ ……無いけど』

「あっそ、じゃあ、エノキダケ買つといて」

『え……？』

「エノキダケ。キノコの」

『エノキ……ダケ』

なんか妙な間だな、と思った才麗は、

（清海んちの食卓にはあまりのぼらないのかな？）

なぜか、そう考えた。

「わかんなかったら、店員さんに、エノキダケ下さいって言えばいいから。あと、マジで余計なもの買つてくんやよ？ それとレシートな！」

才麗はそう言って、ケータイを切り、採点に戻った。

一時間後。

才麗は啜えていたピースを掴んで、今まさに清海のデコに押し付けようとしていた。

「……オメーよお。なんでエノキしか買ってきてねえーんだよ？」

先ほど、清海から渡されたレシートには、エノキダケしか表示が無かった。

「だって才麗ちゃん……『エノキだけ買ってこいって』」

「エノキダケだよ！ エノキダケだけ、じゃねーよ！ なんの為のメモだよ！」

「だって、エノキだけで、余計なもの買うなって……メモのが余計なものになったのかなって……冷蔵庫にあるのを思い出したのかなって……」

「な訳ねーだろ！ だったらそう言っとるわ！」

## モービルスーツ

会議の席上、あまりに荒唐無稽な真田雪の提案に、望月六華は何を言われたものか、理解が出来なかった。とはいえ、それも一瞬、すぐに思考を回復させて、彼女は雪の言葉を反復した。

「私に作れと？ その、バンダムとやらを」

「そう！ バンダムさえあれば、他校、おそるるに足りず！」

雪は拳を握り締めて、本気でそう確信しているようである。まあ、実際作れるのであれば、その確信は間違っではない。作れりやね。「ふうむ。そもそも何故、私にバンダムとやらを作らせようと思っただのだ？」

どうせ十環じゅうわんがDVD貸したんだらうな……。

タイムリーに連邦のピンクい制服に身を包んだ笈十環を眺めながら、佐助は早々に結論付けて、どうやったらこの下らない会議をさっさと終らせるかを考える事にした。

「昨日の深夜にオヴァハンゲリオンの再放送を観て」

「なんでだよ!？」

我知らず、佐助はつつこんでいた。

「うん。だって、紫のは生物兵器でしょ？」

「うんそう」

佐助より先に、十環が頷く。

「でも白いのは、完全機械だから、六華ちゃんにもいけるんじゃないかと」

「なるほどお」

感心する十環と三好清海。

「そのバンダムとやらは、完全機械なのか、十環」

確認してみたところ、即答した十環へ、畳み掛ける六華。

「デカイか？」

「まあ、大きいかな。ファーストで三十五メートルはあるけど」  
「デカイな。コックピット作らねば」

六華はどうもやる気らしい。

「ちよ、え？ 作る気か？」

佐助は面食らう。

「うむ。完全機械なら、科学者魂の見せ所だ」

六華はそう答えた。

「この前、CPUとか作れつつた時、無理だとか言ってなかったか？」

「佐助。お前は馬鹿か？ お前のCPU脳ミソのクロックは一メガヘルツか？ いいか？ 科学というものは、ちいちゃくするのがしんどいんだ。ケータイだって元々はデカかっただろう？ デカイのなら、やりようもあるうと言っもの！」

六華は不敵すぎるほど不敵に微笑んだ。

「とはいえ、三十五メートルは流石にデカ過ぎる。パワードスーツサイズなら、三日で作れるが……」

「マジでか！？」

「だが、用意して貰うものがある」

「用意しましょうとも。ご先祖様の名にかけて！」

雪は安請け合い。

「では、バンダリウムを調達して欲しいのだが」

「ばんだりうむ？ なにそれ？」

雪は首を捻る。十環は、嘆息してのち、解説し始めた。

「レアメタルの一種でこれが使われたモバイルスーツだからこそバ  
ンダムという名称でそれまでのモバイルスーツには無い強度の装甲  
を」

「ウザイ！ オタクが調子こくほど見苦しいものは無い！」

三好伊為いなみ三が叫んだ。

「ゴメン……」

十環はしょんぼりした。

「つーか、六華。あんた何でピンポイントでバンドリウムとか突けるわけ？ 知ってなきゃ無理でしょ。知らない体でここまで進めていて」

霧隠才麗が指摘した。

「当たり前前田のクラッカー。名作科学番組は新旧問わずチエックするのが科学者の基本だし」

「あれって、科学番組か？」

才麗が呟いた途端、ピースの先端の灰が落ちた。十環が感極まる。

「そう！ アニメじゃない！ 現実のもの！」

「まあ、それはそれとして、調達が無理でも、明日迄に製作できる。むしろ、今日中に出来るが……性能は落ちる」

「早っ！」

思わず佐助がそう口にしたが、直後、ふと悟った。

ああ。まじめにやる気ねえわ。六華の奴。

「じゃあ、明日！ 費用は？」

と、雪。鼻息が荒い。

「そうだな……。ゼロだ」

「じゃ、ゴー！！！！！」

雪がゴーサインを出した。

「ちなみにコレが、一番人気のファーストのデザイン」

パパッと十環がチラシの裏に書いたのだが、気持ち悪いくらい上手かった。

## バンダム

「これが私の作ったパワードスーツサイズモービルスーツだ」

望月六華が右腕で全員の視線を誘導した先には、ダンボールが五箱。

「これが……この中に、パワードスーツサイズのモビルスーツが……！」

瞳をキラキラさせて、真田雪はダンボールを開けた。

「あれ？ 何にも無い……」

ダンボールは五箱とも、カラだった。

六華は微笑みながら、五箱ともダンボールの天地の蓋を開けて、筒状にすると、雪に被せていった。

ダンボールに包まれた雪の完成。

六華は丁度、雪の胸部あたりのところへ、太インキで、バンダム、と書いた。

「これが私なりのバンダムだ。バンダム『ジャンクロード』」

「やっぱやる気なかつたな」

猿飛佐助が疲れたように言うと、六華も頷いた。

「当然だろう。金も無いのに、阿呆な事は出来ん」

やってる事は充分阿呆だよ……。

佐助は肚裡で嘆息した。

「六華ちゃん、これ、中暗い！」

ジャンクロードの中から、雪のくぐもった声。

「コックピットだからな。ちなみに、脚部にキヤタピラーを書けば、バンタンクに早変わり」

と、六華は付け足した。

## スケッチ

悲しい事に、猿飛佐助は、真田雪、由利詩来うたとと同じクラスである。美術の時間、教諭が提示したのは、先日、教諭自身が釣り上げてきた、サクラ鱒だ。

筆を走らす、静寂の音。

静かな空気、寂たる教室。普段の騒々しい日常が、うって変わって穏やかなものになる。

心洗われる、佐助の心境はまさに、それだった。

だがしかし、佐助のささやかな望みは、いつもすぐに打ち砕かれるのが、常だった。

「そう言えば、今のこの状況って」

ふと詩来が、そう呟いた。

「どうかした、ウタちゃん？」

画用紙から、顔を上げて、雪。

「男子たち令、全員、マス書いてる」

エンピツの、折れる音が、そこかしこからした。折ったのは、全員男子だった。

「マス書いて、写生してる」

聞いた雪は、頷いた。

「そうだねえ、写生してるねえ」

佐助はキレ、怒鳴った。

「下ネタはやめろっつってんだろ！」

佐助の望む、平穏な日常は、こうしていつも壊されるのだ。そして、純情な男子達は、そうじゃない子も含めて、ドキドキさせられるのだった。

てか……くだらねえなあ、おい。

スポラーウーマン2 ・ 横網(前書き)

一つの話では、最低文字制限数に届かなかった為、二つの話を合  
わせたものとなります。

ご了承ください。

ズボラーウーマン2 ・ 横綱

ズボラーウーマン2

午前八時起床。

眠い目を擦りながら、三十分かけて、制服に着替える。

三十分うたた寝。

二時間目に登校。

昼休みまで眠る。たまに起きてる時は、机に突っ伏して、ボケ

ツとする。

昼食をボケ ツとしながら、摂る。

放課後まで眠る。

一応、委員会には顔を出す。

委員会解散後、午後六時に帰宅。そのまま眠る。

海野十六夜こいしの毎日は、ほぼ、このサイクルである。

横綱

「輿錦というのは、どこで獲れるお米ですか？」

職員室で。

高校二年の真田雪と三好清海は一人して、そんな質問を霧隠才麗  
国語教師にした。

米じゃねーよ、ハワイ出身のお相撲さんだよ、と答えるのもバカ  
バカしくって、才麗は一言、

「ハワイ」

煙を吐き出した。

「ハワイと言うと、アメリカですか？」

と、清海。

「つまり、アメリカのお米ですか？」

「ああそうそうそのとおり」

「なるほど」

雪はなにやら一人で合点した。

「さすが米国だけある」

「……んん？ ……おお！ 凄い！ 雪ちゃん凄い！」

「……」

才麗はもう何も言わない。ただただ、二人の行く末を、憐れんだ。そして新しいピースの封を切った。

そついや、昔、日本の総理大臣がアメリカの大統領と会談したとき、似たような事言って、ダダスベリした事があったような気がするな、とあやふやな記憶が蘇った。

「先生、もう一つ」

雪が手を挙げた。

「何？ まだなんかあんの？」

「DVDとブルーレイの違いを」

「六華に訊けつつたろうが！」

知りません。日本語の話せる方を呼んでください。さようなら。

「エクスキューズミー？」

三好伊為<sup>いなみ</sup>三へ、道を尋ねる外国人観光客は哀れである。

三十代ほどの白人男性だ。彼は、駅に行きたかった。それを尋ねる前に、しかし、

「ユーキャンスピークジャパニーズ？」

非常に流暢なアクセントで、伊為三はそう言った。白人男性はかなりほっとした表情になった。しかし、妙な事を訊くな、とも思っ

た。  
「ノー」

白人男性は言いながら首を振った。伊為三が何も続けてこないの

で、彼は、駅への道順を改めて訊ねた。  
「ジユヌコンプランパ。アプレケルカンキパルルジャポネ」

「ホワット？」

「オルヴワール」

手をひらひらさせて、悠々と、伊為三は立ち去った。

何かなにやら、わからぬまま、白人男性はその場にしばらく佇んでいた。

## 麦

「あつははー。また派手にやったねー」

転んで出血した戸澤君が、猿飛佐助に付き添われて、保健室で根津末広みひろの診察を受けていた。

「とりあえず消毒しとこっか」

「お願いします」

末広は、デスクの上に置いてあつた、焼酎のビンを掴んだ。すぐさま佐助が止める。

「だから、やめろよそれ」

「いいえ、是非ともお願いします！」

前回は佐助に押し止められたが、今回こそは、末広の口からブーッ！ を、戸澤君はして欲しかった。なんの因果か戸澤君、末広にホの字一（死語）なのだ。

「戸澤 それほどまで……」

三百六十五日二十四時間酔っ払ってる、駄目人間の事が。

と、これはすんでの所で佐助は飲み込んだ。

「よし。俺も男だ。戸澤、お前の好きなようにしろ。ただし、これからはちよつと距離を置かせて貰うけど……」

「ありがとう佐助！ さすが俺の親友だぜ！」

「うん。もう親友じゃないぞ？」

「さあ、根津先生！ お願いします！」

「よし来た」

末広は焼酎を口に含み、そのまま嚙下した。

「……あゝ、おいし」

その一飲みが、リミットだったようだ。末広の瞳がトロリとして、直後、潰れた。

「……ええー……っ！ そおんなあー……っ！」

この戸澤君のがっかり声を、佐助は出来る事なら、早く忘れたい。

立法 司法 行政 ・ スポライウーマン THE MOVIE (前書き)

一つの話では、最低文字制限数に届かなかった為、二つの話を合わせたものとなります。  
ご了承ください。

立法 司法 行政 ・ スポライウーマン THE MOVIE

立法 司法 行政

「三権分立とは？」

猿飛佐助は、友達の小澤君から、こんなクイズを出された。ふふん、と鼻で笑って答えようとした佐助だったが、

立法と司法とアレ？ あと一個なんだっけ？ ど忘れした！

「はいはい！」

たまたま、居合わせた、三好清海が、

「イツコ、ニッコ、サンコーン！ の人が、こう、二人に」

それじゃ『サンコンさん分裂』だ。

佐助とその友達の戸澤君は頭が痛くなった。

「違うよ清海ちゃん」

これもたまさかに居合わせた、真田雪が正解を導き出す。

「朝に通勤中の人に英語の問題を出してたおじさんが、こう、二人に」

それじゃ『ウィツキーさん分裂』だ。

佐助とその友達の戸澤君はめまいがしてきた。

ズボラーウーマン THE MOVIE

海野十六夜が、とうとう、学校に来なくなった。

## 烏鷲と地雷

戸澤君の一手に、猿飛佐助はにんまりとした。

「戸澤、それは無い手だぜ」

佐助は黒石を置いた。

「あ　っ！」

そう言った戸澤君の顔を見て、またにやりと笑う佐助。

「そうかあ……それでセキかあ……」

戸澤君は唸りながら盤面を見渡した。

「もう……無理か。　ありません」

天気の良い日は、昼休みに戸澤君を誘って、屋上で囲碁や将棋をやるのが佐助の楽しみの一つである。

ぼかぼか陽気の気持ちいい陽射しを浴びながら、佐助は石を片付ける。

「ああ　平和だなあ」

佐助がそう呟いた途端

「平和ボケは発想力を低下させるぞ、佐助」  
背後からそう言われた。振り返ると白衣を着た望月六華りっかが立っていた。

「ふむ、囲碁か。ジジ臭いインドアな趣味だな。男なら趣味はパソコンの自作だろう」

「余計なお世話だ。奥が深くて面白いし、だいたいお前が思ってるほどジジ臭くも無い。　つつか、パソコン自作ってアウトドアか？」

「て、言うか、なんか用スか？」

戸澤君はまた、パーツシヨップに連れて行かれるのでは、と、少々身構えている。

「つむ。ここからなら、仔細を観察できるからな」



死ぬだろ！」

「そうだな。そのための道具だからな。この地雷を校門から校庭、果ては昇降口に、隙間なく配置する事によって、他校が万が一攻めてきても、ふふふ、我が校を落とすことは出来まい」

戸澤君は佐助の影に隠れておびえた。

「コワイ……コワイよ……この人……！ そんなことしたら、俺達、一歩も校舎から出られなくなるのに……！」

戸澤君の言葉を聞いて六華は、

「……あ」

今、それに気付いたらしい。

「べ 別に佐助がそうしろって言ったから、したんじゃないんだからね！」

「……なにそれ。まるで俺が元凶みたい えっ！？ まさかの責任転嫁！？」

…… 幸いな事に、死傷者は出なかった。本体のスイッチを押したのは、人ではなく、校庭でキャッチボールをしていた二人組みの片方が、そらしたボールが、そこまで転がっていったからだ、あとで分かった。

その二人組みは、「捕れなかったんだから、お前が拾って来いよ」

「いや、そらしたのはお前だろう」との押し問答をされていて、難を逃れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9159u/>

---

十勇士の裔ども

2011年7月18日03時34分発行